仮名手本忠臣蔵

かなでほんちゅうしんぐら

〔解　説〕

寛延元年（一七四八）八月、竹本座初演。竹田出雲・三好松洛（しょうらく）・並木千柳（なみきせんりゅう）の合作。八月十四日から十一月まで打ち続ける程、当初から人気が高かった。言うまでもなく赤穂浪士の仇討ちを脚色したもので、同じ題材を扱った数多くの先行作品の集大成であり、「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」と共に三大浄瑠璃の一つに数えられている。

元禄十四年（一七〇一）三月十四日、勅使響応の際、江戸城松の廊下で、浅野内匠頭が吉良上野介を刃傷に及んだ事件から、元禄十五年十二月十四日の討入りまでを一年に凝縮し、春夏秋冬に配列したのも心憎い脚色である。時代を足利時代に、場所を鎌倉に置き換え、登場人物も、浅野内匠頭を塩治（えんや）判官、吉良上野介を高師直（もろのお）、大石内蔵助を大星由良之助（ゆらのすけ）などと、太平記の世界をとってつけており、また、それは幕府の検閲を逃れるための手段でもあった。

本筋の義士劇の他に、若狭之助、本蔵、勘平、天河屋（あまかわや）の件が発生し、世話場・道行等を交え、もっぱ

ら首尾を整えている。討入りの事実と戯曲的内容を巧妙に一致させた名曲である。

〔ここまでのあらすじ〕

《大　序》

暦応元年（一三三八）二月下旬、鶴ヶ岡八幡宮の造営が成就したので、足利将軍尊氏の弟・直義は、兄の代参として鎌倉へ下向、新田義貞が討死の時に着用していた兜を宝蔵に納めることになった。塩冶判官の妻、顔世が召され、四十七の兜のうちより、義貞のものを見分ける。

直義と、このたびの響応役、塩冶判官・桃井若狭之助は、兜を宝蔵に納めに行く。後に残った指南役、高師直は、艶書を渡して顔世を口説くが、戻ってきた若狭之助の機転により、顔世はその場を逃れることができた。

《三段目》

正七つ時（午前四時）の登城に先がけ、西の御門で師直に追いついた本蔵は、進物を山と並べて首尾よく師直の機嫌を取り結ぶ。師直の勧めで本蔵も門内に入る。やや遅れて、塩冶判官が早野勘平を供に登城。腰元おかるは、顔世から師直への文箱を届けに来る。勘平は判官から師直に渡せばよいと、おかるを待たせて奥に入る。

「おのれ師直、真二つ」と意気ごむ若狭之助の前に現れた師直は、前日とはうって変わって低姿勢。金が言わせた追従とは夢にも知らぬ若狭之助は、すっかり拍子抜けして、刀を抜くことができなかった。

さて、判官が顔世からの文箱を師直に手渡すと、中には新古今の歌。師直は恋のかなわぬしるしと悟り、判官に散々

当てこすりを言う。判官は腹にすえかね、師直に斬りつけてしまう。判官を抱きとめたのは、次の間に控えていた本蔵であった。

館の騒動に、勘平は急ぎ裏門へ。判官が閉門を仰せつけられ、網乗物にて帰ったと聞き、動顛する。おかるとの逢瀬を楽しんで、主人の大事に居合わせなかったことを恥じ、切腹しようとするが、おかるに止められ、おかるの在所、山崎へと落ちてゆく。

《五段目》

山崎で猟師をしながら帰参の時機を待っていた勘平は、夜の街道筋で朋輩千崎弥五郎に出会い、主君の石塔建立の計画を聞き、御用金を調える事を約して別れた。

百姓与市兵衛は娘おかるを祇園へ売る約束をして得た半金五十両を懐にしての帰途、斧九太夫の倅、定九郎に金を奪われ、刺し殺される。そこに猪が通りかかり、それを狙った鉄砲が定九郎のあばらを貫いた。勘平は猪を打ちとめたと暗がりを手で探るとそれは人間であった。手に触れた財布を天の与えと押しいただき、千崎に届けようと後を追った。

（二つ玉の段）

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

（一般社団法人　義太夫協会発行）

二つ玉の段

急ぎ行く。

またも降り来る雨の足、人の足音とぼとぼと、道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も、直ぐなる心堅親仁（かたおやじ）、一筋道の後から、

「オーイ〳〵。オイ親父殿、先にから呼ぶ声が、貴様の耳へは這入らぬか。この物騒な街道を、よい年をして大胆々々。連れにならう」

と向ふへ廻り、ぎよろつく眼玉、ぞつとせしが、さすがは老人、

「これは〳〵お若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして一人旅は嫌なれど、サアいづくの浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰まり、この中から一家中の在所へ無心に往たれば、これもびた平なか才覚ならず。埒の明かぬ処に長居はならず、すごすご一人戻る道」

と、半分言はさず、

「ヤイ〳〵〳〵喧しいわい。有様が年貢の納まらぬ、その相談を聞きには来ぬ。コレ親仁殿、俺が言ふ事とくと聞かしやれ、マアかうぢやわ。こなたの懐に金なら四五十両の嵩、縞の財布にあるのを、とつくりと見付けて来たのぢや。貸して下され〳〵。男が手を合はす。定めて貴様も何ぞつまらぬ事か、子が難儀に及ぶによつてといふ様な、ある格な事ぢやあろうけれど、俺が見込んだら、ハテしよ事がないと諦めて、貸して下され、貸して下され」

と懐へ手を差し入れ、引ずり出だす縞の財布、

「アヽ申し、それは」

「それはとは、これ程こゝにあるもの」

と、ひつたくる手に縋り付き、

「イエ〳〵、この財布は後の在所で草鞋買ふとて端銭（はしたぜに）

を出しましたが、後に残るは昼食（ちゅうじき）の握り飯。霍乱（かくらん）せん様にと娘がくれた和中散、反魂丹（はんごんたん）でござります。お許しなされて下さりませ」

とひったくり、逃げ行く先へ立ち廻り、

「エヽ聞き分けのない。酷い料理するが嫌さに、手緩う言へばつけ上がる。サア、その金こゝへ捲き出だせ。遅いとたつた一討ち」

と、二尺八寸拝み討ち、

「ノウ悲しや」

と言ふ間もなく、唐竹割りと切り付くる、刀の廻りか手の廻りか、外れる抜身を両手にしつかと掴み付き、

「どうでもこなた、殺さしやるの」

「オヽ、知れた事。金のあるのを見てする仕事。小言吐かずとくたばれ」

と、肝先へ刺しつくれば、

「マア〳〵待つて下さりませ、マア〳〵待つて下さりませ。ハア是非に及ばぬ。成程々々、これは金でござります。けれどもこの金は、私にたつた一人の娘がござります、その娘が命にも代へぬ大事の男がござりまする、その男のために要る金。ちと訳ある事故浪人して居まする。娘が申しまするは、あのお人の浪人も元は私故、何とぞして元の武士にして進ぜたい、進ぜたいと、嚊（かか）とわしとへ毎夜さの頼み。アヽ身貧にはござりまする。どうも仕覚（しがく）の仕様もなく、婆と色々談合して娘にも呑み込ませ、婿へは必ず沙汰なしと示し合はせ、ほんに〳〵親子三人が血の涙の流れる金。それをお前に取られて娘はなんとなりませう〳〵ぞいの。マア一里行けば私が在所、金を婿に渡してから殺されませう。申し、申し、娘が喜ぶ顔見てから死にたうござります、これ申し。さりとてはお情けない。アヽかういふ事とは露知らず、さ

ぞ女房子が待ちおらうと、そればっかりが気に掛かり、冥途の道をうろうろと迷ひまする」

とせき上げて、取り乱したる恩愛の心ぞ思ひやられたり。

『南無阿弥陀仏〳〵』

「貧乏寺の念仏の声、オヽ悲しいこつちやわ。もつととこぼえ、ヤイ老いぼれめ。その金で俺が出世すりや、その恵みでうぬが倅も出世するわやい。人に慈悲すりや悪うは報はぬ。アヽ可愛いや」

とぐつと突く、『うん』と手足の七転八倒、のたくり廻るを、脚にて蹴返し、

「オヽいとしや痛かろけれど、俺に恨みはないぞや。金がありやこそ殺せ、金がなけりやコレなんのいの。金が敵だいとしぼや。アヽ南無阿弥陀仏、南無阿弥。南無妙法蓮華経。どちらへなりと失せをろ」

と、刀も抜かぬ芋ざし抉り、草葉も朱(あけ)に置く露や、年も六十四苦八苦、あへなく息は絶へにけり。仕済ましたりと件の財布、暗がり耳の摑みよみ、

「ヤア五十両、アヽ久し振りのご対面、忝なし」

と首にひつ掛け、死骸をすぐに谷底へ、はね込み蹴込み泥まぶれ、はねは我が身にかゝるとも知らず立つたる後より、逸散に来る手負ひ猪、「これはならぬ」と身をよぎる、駆け来る猪は一文字、木の根岩角踏み立て蹴立て、只一まくりに飛び行けば、『あはや』と見送る定九郎が、背骨をかけてどつさりと、肋へ抜ける二つ玉、ふすぼり返つて死したるは、心地よくこそ見えにけれ。

『猪撃ち留めし』と勘平は、鉄砲引提げこゝかしこ、

「こりや人、南無三宝」

『天の与え』と押し頂き、猪より先へ逸散に、飛ぶが如くに